九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

Anticoagulation and Risk of Stroke Recurrence in Patients with Embolic Stroke of Undetermined Source Having No Potential Source of Embolism

佐藤, 倫子

https://hdl.handle.net/2324/4475025

出版情報：Kyushu University, 2020, 博士（医学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (2)

（別紙様式２）

氏　　名	佐藤　倫子
論　文　名	Anticoagulation and Risk of Stroke Recurrence in Patients with Embolic Stroke of Undetermined Source Having No Potential Source of Embolism
論文調査委員	主　査　　九州大学　　教授　　二宮　利治 副　査　　九州大学　　教授　　筒井　裕之 副　査　　九州大学　　教授　　馬場園　明

論　文　審　査　の　結　果　の　要　旨

塞栓症の原因となり得る潜在性塞栓源を有さない塞栓源不明脳塞栓症（embolic stroke of undetermined source: ESUS）における有効な再発予防法については未だ十分に検討されていない。そこで本研究では、ESUS 患者において、抗血小板薬（antiplatelets: APs）と比較し経口抗凝固薬（anticoagulants: OACs）の使用が脳卒中再発のリスク低下と関連しているかどうかを検討した。2007 年 6 月から 2017 年 5 月までに福岡脳卒中データベース研究に登録された初発急性期脳梗塞患者 8790 名のうち、潜在性塞栓源のない ESUS と診断され、退院時に抗血栓薬の単独療法が施行された 681 名（平均年齢 69.7±14.1 歳、男性 48.3%）を対象とした。Cox 比例ハザードモデルと Fine and Grey モデルを用いて、退院後の再発性虚血性脳卒中のハザード比（HRs）と 95%信頼区間（CIs）を推定した。

その結果、追跡期間中（平均 3.4±1.7 年）における再発性虚血性脳卒中の発生率（100 人年あたり）は、AP で治療された 489 名の患者で 4.4、OAC で治療された 192 名の患者では 2.0 であった。OAC の使用は、多変量調整後も（多変量調整 HR [95%CI]、0.42 [0.23-0.80]）、さらに死亡を競合リスクとみなした場合においても（0.45 [0.24-0.85]）、再発性虚血性脳卒中のリスク低下と関連していた。また傾向スコアマッチングコホートにおいても、AP で治療された患者と比較し OAC で治療された患者では再発性虚血性脳卒中のリスクの低下がみられた（0.32 [0.15-0.67]）。

以上の成績は、潜在性塞栓源が特定されていない ESUS 患者において、抗凝固療法が血小板療法比べ再発性脳卒中のリスク低減に有用であること示唆するものであり、この方面の研究に知見を加えた意義あるものと考えられる。本論文についての試験は、まず研究目的、方法、内容とその意義などについて説明を求め、各調査員より専門的な観点から論文内容およびこれに関連した事項について種々の質問を行ったが、いずれについても適切な解答を得た。

よって、調査委員合議の結果、試験は合格と判定した。